

2020年の「ぶんせき」編集を振り返って



勝 田 正 一

今年は新型コロナウイルス感染症の流行によって人々の生活が一変した一年でした。その状況下で「ぶんせき」誌を無事に定期刊行できたのは、執筆者、前・現編集委員、事務局、印刷所など多くの方々の尽力によるものです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。さて、本稿では今春以降の「ぶんせき」編集委員会の活動について簡単に振り返ってみたいと思います。

私はこの4月に編集委員長を拝命しましたが、就任早々に新型コロナの流行により、対面での会議を実施できなくなりました。打ち合わせはすべてメールかオンライン会議となり、事務局も在宅勤務を余儀なくされました。そのような編集活動に慣れるまでに少し時間がかかりました。なお、会議のオンライン化は会議費や旅費の削減という点では非常に有効であるため、コロナ収束後も継続することになると思います。

編集委員の主な任務は、会員にとって有意義な記事を掲載するために、企画・執筆依頼・査読・校正などを行うことです。本誌には、「解説」、「講義」、「展望」、「話題」、「トピックス」のように主に各委員が単独で企画して執筆依頼まで行う欄と、「特集」、「入門講座」、「ミニファイル」のように小委員会と呼ばれるワーキンググループ内で主題・内容・執筆候補者等を議論しながら決めていく欄があります。これらの編集作業は通常業務として日々行っています。また、今年度は新たに緊急連載「新型コロナウイルスと分析化学」を企画しました。薬学系の編集委員が中心となって迅速に企画・執筆依頼・査読を進め、本誌としては異例の速さで8号から掲載を始めることができました。本務多忙の中、短期間での執筆にご協力いただいた執筆者の方々には、感謝の念に堪えません。

コロナの影響を最も顕著に受けたのは「こんにちは」欄です。大学や研究所等への訪問取材が困難になったためです。秋になってようやくいくつか訪問の予定が立ちましたが、継続的に掲載できるようになるまでにはもう少し時間がかかるかもしれません。

その他、編集委員会で喫緊に対応しなければならない課題が二つあります。一つはこれまで事務局への依存が大きかった編集プロセスを見直し事務局の負担を減らすこと、もう一つは雑誌を冊子体から電子体へ移行することです。いずれも会員数の減少等による学会収入の減少に端を発しており、理事会からの依頼事項です。他の編集委員や事務局と共に、課題解決に向けて努力していきたいと考えています。

以上のように、「ぶんせき」編集委員の仕事はかなりハードです。これを各委員が本業の傍らで行っているわけですが、その根底には「ぶんせき」誌の伝統を守り、さらに魅力ある機関紙を作りたいという熱意があります。会員の皆様には、編集委員の仕事をご理解いただき、執筆の依頼があった際には是非お引き受けくださいますようお願いいたします。

(Shoichi KATSUTA, 千葉大学大学院理学研究院, 「ぶんせき」編集委員長)